



鳥取短期大学幼児教育保育学科 准教授 國本真吾

「福祉で輝く地域づくり」に向けて

◎「福祉で輝く地域づくり」への思い

鳥取県の福祉教育を推し進める、新たなテキストが完成しました。「地域で取り組む福祉教育のすすめ “ともに生きる”福祉で輝く地域づくり」は、これまで制作された小学生・中学生向けの福祉教育読本、そして学校教員向けガイドブックに続く、4冊目の福祉教育用のテキストです。

行政の在り方に目を向けると、10年前ほど前には「地方分権」、そして最近では「地域主権」の名のもとに、様々な変革が求められています。そのような流れの中で「福祉」のあり方も変化しており、福祉教育にも新たな風が吹きつつあります。しかし、私たちは政策や時代の変化を受けての現代の福祉教育をどのように創造するかということではなく、こんな時代だからこそ本質を見失わない実践が必要という認識で、鳥取県オリジナルの福祉教育テキストづくりを行ってきました。

「福祉教育」は、単に福祉の知識を身につけるための活動ではありません。身近な福祉に関わる課題や問題を出発点に、その解決に向けた営みを生み、また解決に向けた過程において関わる人がいかに主体形成を図っていくかという、“人づくり”を支援する活動だと言えます。学齢期では課題や問題に“気づいて”いくための「福祉の心」を育み、成人期以降はそのような“気づき”から、よりよい社会を形成していく“築き”の主体としての人間発達が期待されます。

鳥取県内でも、様々なところで「まちづくり」がキーワードとして飛び交うことが多くなっています。「地方分権」「地域主権」という行政のあり方を変える動きもあってか、その余波は私たちの身近な生活レベルにまで影響を及ぼすようになりました。私は、地域の中の福祉の課題解決は、その地域の「まちづくり」に繋がるものだと認識しています。それは、その地域で暮らす人々が安全で安心に、かつ健康で文化的な生活を保障されるという、「生存権」(日本国憲法第25条)保障に他なりません。逆に、ただ単に「まちづくり」を優先していくと、そこでは福祉の課題は忘れ去られてしまう可能性が大きく、そこに暮らすすべての住民にとって安全で安心した地域づくりには至らないのではないのでしょうか。だからこそ、「福祉で輝く地域づくり」という言葉には、真の「まちづくり」を願っての意味が込められていると言えるのです。

◎「インクルーシヴ」な社会の形成へ

私は、仕事の他に友人たちとともに沖縄音楽の演奏活動を行っています。グループの名前は、「沖縄音楽グループ・ゆいま〜る」です。「ゆいま〜る」は沖縄の方言で、「優しさがめぐる」という意味です。自分たちの発する音楽を通じて、それを聞く人々に温かくて優しい気持ちを持ってもらえたらという思いから、この名前が付けられました。活動の幅も、仲間内で楽しむレベルから、徐々に福祉施設訪問や各種イベントでの演奏へと広がり、最近では障がいのある青年たちが、一緒にステージに立って歌ったり・踊ったりと、自分たちも一人のメンバーとして加わるようになっていきます。

この「ゆいま〜る」という言葉は、社会福祉や障がい児教育の世界で言われる「インクルージョン」という概念と重なります。インクルージョンとは、「包み込む」という意味で置き換えることができます。障がいの有無はもちろん、老いも若きも(少子高齢化)、性別の違いや(男女共同参画)、文化や国籍の違い(多文化共生)を超えて、その地域に集う人々が優しく温かく包まれた環境の中で暮らせるよう、それぞれが社会の一員として認められ支えられていく社会づくりが必要です。

「福祉で輝く地域づくり」の上で、「ゆいま〜る」や「インクルージョン」の視点は不可欠だと言えるでしょう。「福祉教育」はそれに関わる“人づくり”の実践であり、教育基本法第1条でいう「教育の目的」(人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない)の具体化に他ならないのです。

